

ブラジルの成長とユセーロ

—王子グループのブラジル事業

サステイナブルなビジネスモデルの先駆けとなる植林プロジェクト

王子グループのブラジル事業はCelulose Nipo Brasileira(セニブラ社)の歴史に代表され、2023年にセニブラ社は創立50周年を迎えた。1960年代後半、高度経済成長期の最中にあつた日本の製紙業界は、紙の原料となる木材チップやパルプを長期安定的に確保し得る手段を模索していた。そのような中、ブラジルの資源開発企業大手のリオ・ドセ社(現ヴァーレ社)から、木材チップやパルプの対日輸出を目的にユーカー植林事業を行いたいという要望が伊藤忠商事を通じて王子製紙(現王子ホールディングス)に届いたことを契機として、1973年に伊藤忠商事と王子製紙を含む大手紙パルプメーカー11社とリオ・ドセ社との合弁でセニブラ社を設立した。

王子ホールディングス社長

磯野裕之

いその ひろゆき



日本の植林・パルプ製造技術とリオ・ドセ社が保有する植林地資源および鉄道・港湾輸送システムを組み合わせることで、苗の生産・植え付けからパルプの製造販売・輸出までを行う持続可能なビジネスモデルを、50年以上前に実現したのである。日本政府は当時、このプロジェクトを「ブラジルの経済発展および日伯両国間の経済交流を促進し、両国の友好関係の増進に寄与することが多大」として国家プロジェクトに認定した。その後もその期待に応えるように、ハイパーインフレなどの幾多の困難を乗り越え、両国の国民性が融合した日伯経済協力の代表例とも評される非常にユニークで強固な事業に成長した。

合弁会社を設立した当時、ユーカー植林木を原料とした市販パルプはまだ世の中に認知されていなかったが、それから半世紀にわたって本事業を継続してきた最大の要因は、再

生可能な森林をベースとしたサステイナブルなビジネスモデルに加え、当初からESGの基盤を整え、神奈川県に面積より広い25万鈴に及ぶ広大な森林を適切に管理し、地域社会との結びつきを重視し、共存しながら活動してきたことにある。森林を適切に育て、管理することは、持続可能な森林資源、すなわち再生可能な原料を作るだけではなく、CO₂の吸収固定や生物多様性の保全、水源かん養、土壌保全など、森林が持つ多面的な機能を高めることにつながる。セニブラ社は50年余りの歴史の中で、雇用創出による社会貢献にとどまらず、環境に配慮した活動や地域社会に貢献する活動にも継続的に取り組んできた。現在もおお、このような活動に力を注いでいる。セニブラ社の事業地域は、世界でも有数の生物多様性を誇る大西洋岸森林(マタ・アトランティカ)に属しているが、残念ながら

らマタ・アトランティカの面積はこの500年間で大きく減少している。この森林後退を食い止めるために、セニブラ社では荒廃地を復元し、近隣の自然林同土をつなぎ合わせ、拡張させる自然林保護活動を行っているほか、外部の研究機関や大学・NGOと連携し、社有林内および近隣の動植物や水資源などをモニタリングし、絶滅危惧種を含む生態系の保護・保全活動も行っている。

感熱紙事業(Oji Papeis Especiais社：OPE社)の取り組み

次に、当社のブラジルにおけるもう一つの

柱である感熱紙事業に触れておきたい。ブラジルでの感熱紙製造は、当時の農場のオーナーがサトウキビの搾りかす(バガスパルプ)を原料とする抄造(紙料から紙をすくこと)を開始した1953年にまでさかのぼる。その後、米国企業の技術ライセンスを活用し、ノーカ1ポーン紙・感熱紙の生産を開始したが、さらなる品質向上を図るべく、1989年に神崎製紙(現王子ホールディングス)からの技術ライセンス供与へと方針転換をした。以来三十有余年にわたるOPE社との深く良好な関係が始まる。その後も市場ニーズの高まりに合わせるべく、適時、新設備の導入や生産能力の

増強を行い、201

1年の王子製紙現王子ホールディングス)による買収によってOPE社が100%子会社となつて以降、感熱紙事業は

飛躍的な進歩を遂げた。また、ブラジルだけでなく中南米における感熱紙市場の急速な広がりに伴い、感熱紙の生産能力を増強し、中南米各国において高いシェア

を得るに至る。今日、当社が南米唯一の感熱紙メーカーの地位を揺るぎないものに

できたのは、当社が持つ感熱紙製造技術・ノウハウを存分に投入し、現地のニーズに合わせた製品開発に取り組んできた成果であると自負している。

次の50年へ

当社では企業価値向上に向けた取り組みの一つとして、事業の核を森林と捉え、森林が持つ様々な機能の経済価値化を検討している。この一環として、森林をベースに既存事業の枠を超えたバイオビジネスを次世代の中核ビジネスとして段階的に育成し、環境に配慮したパッケージング事業を普及させていく予定である。サトウキビ等の可食バイオマスは、原料確保の面で今後の人口増加や飢餓問題と競合するが、非可食バイオマスである木材は競合しない。これは森林をベースとするバイオビジネスの強みの一つである。

地球温暖化への対応や生物多様性の保全などの環境への配慮という命題に対し、王子グループの大切な財産である森林の機能を存分に活用した事業活動を展開することこそが、当社グループの存在意義、バリューパスである。この理念のもと、これまで培った日伯合弁事業の経験を活かし、森林資源に根付いた事業、具体的には脱石化プラ製品の普及やバイオビジネス等をブラジルの企業や自治体と連携しながら展開していく所存である。われわれはこの資源、特に森林資源の豊かなブラジルに

大きな可能性を感じており、当社事業をブラジルと共に大きく成長・拡大させていきたいと切に願っている。



セニブラ社工場全景(現在)



OPE社設立時の写真

当社が南米唯一の感熱紙メーカーの地位を揺るぎないものに